

AI 時代の“京都橘大”教育を問い直す

2026年1月7日に全学FD学習会が開催されました。講師をお引き受けいただいた美馬のゆり先生の希望もあり、2020年1月に開催された全学FD学習会「授業設計ワークショップ～100分授業の設計の仕方～」以来、**実に6年ぶりの対面開催**となりました。コロナ禍から教員懇談会等あらゆる全学企画がオンライン化されていることを考えれば、京都橘大学の教員が一堂に会する機会に初めて参加されたという先生も多かったのではないのでしょうか。参加者同士で会話する時間は大変限られたものになってしまいましたが、会場全体の活発な議論の様子から、**京都橘大学の教育“活”力**を感じ取ることができました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。

講義の内容は「AI時代の大学教育を問い直す」と題し、AI論、倫理、教育法、AI社会など、**AIと教育の関係を考える大局的なもの**でした（オンデマンド配信は**コチラ**）。美馬先生も最後に「各々にモヤモヤを持ち帰って欲しい」とまとめておられたように、各々で学んだことや考えたことは違うと思います。個人的には、「教育方法以前に、教育目標から考え直す必要があるのではないか」ということ、またそれを考える上で本学の教学理念「自立・共生・臨床の知」が益々重要な時代になるということでした。自分が担当している科目は、本当に学生の「自立・共生・臨床の知」を育むことにつながっているだろうか、どうすればよりよくこれらを伸ばすことができるだろうかと考えています。

奇しくも、2025年度の新カリキュラムから、**全学教育目標が7つから3つに集約**されています。この3つは、「1. 自立：物事を多角的な視点から客観的に理解するとともに、論理的・批判的に思考したうえで、自分自身で判断して主体的に行動することのできる能力を身につける」「2. 共生：ひろく世界に目を向け、他者の価値観や世界のあり方を尊重しつつ、相互に理解しながら協力して物事に取り組む能力を身につける」「3. 臨床の知：理論と実践を往還する中で知識を実践的に理解するとともに、課題の解決に取り組む中から新たな知を発見する能力を身につける」という、まさに本学の教学理念に立ち返ったものとなっています。**先生方の担当授業もすべて、このいずれかと紐づいているはずですので、各学部の履修の手引き（WEB上から確認いただけます）に記載されている2025年度入学生以降のカリキュラムマップにてご確認いただき、授業づくりの際に意識していただければ幸いです。**

新カリキュラムにおける1年次の全学必修科目「たちばなBasis I・II」では、「自立・共生・臨床の知を考える・実践する」をテーマとしています。各学科より計20名の専任教員から教学理念に関わるオンデマンド講義と討議課題を提供いただき、それを活用して学科横断クラスによるディスカッションを対面授業で行っています。受講生たちは、正解がない問いに対し、自分の考えを組み立て他者に伝えること、他者の考えを踏まえることで思考を広げ深めること、考えを行動に移していくことに挑戦しています。今年始まったばかりの科目であるため、次年度以降も授業改善を続け、AI時代を生きていく基盤ができるような授業づくりに努めてまいります。

先生方におかれましては、今回の全学FD学習会の内容も踏まえつつ、『2025年度授業改善集・大学院教育改善報告集』作成に向けた、本年度の**「教育自己点検・評価」（2月27日メ切）**へのご協力、何卒よろしくお願い申し上げます。

「生成 AI を教員も活用する授業づくり」

2025年11月12日に、本年度第2回目の「たちばな教育サロン」を対面とオンラインを同時に行うハイフレックス形式で開催し、40名（対面12名、オンライン28名）の方にご参加いただきました。以下は、当日のポイントをまとめたものです。報告動画やスライド資料は、[教育開発・学習支援室WEBサイト「学内FD関連動画」](#)からもご覧いただくことができます（パスワードはメール本文に記載させていただいております）。先生方の授業づくりの参考になれば幸いです。

報告1：教育活動に関する相談相手としての AI 活用

総合心理学科 岸 太一 先生

総合心理学科の「心理学研究法Ⅰ」について紹介します。本科目は、心理学を学ぶ上で必須の内容であり、近年重要視されるデータサイエンスの理解にもつながるもので、卒業研究とも密接にかかわるといって大変重要なものと考えています。その分、私の要求水準もおのずと高くなってしまい、テストの難易度が非常に高くなってしまいう問題がありました。そもそも、1人の教員による単独の作問では、どうしても出題範囲や観点到に偏りが出てしまいます。かといって他の先生に相談することも難しいものです。

そこで、生成 AI による作問を試しました。プロンプトは、「科目名：心理学研究法Ⅰ、対象学年：1年生、出題範囲：スライドファイルで代用、形式：5択で10問、難易度：80～90%の正答率、禁止事項：略」です。生成 AI が作成した問題は、一部は要修正もしくは採用不可でした。教員が手直した問題を実際に用いてみたところ正答率は7割程度となり、その他の指標を参照しても「測定」として妥当なものになることが確認できました。結果、注意を要する学生も見えやすくなりました。

生成 AI を作問に使ってみたことで、偏った問題が減り、作問時間が減りました。ただし、AI が作る問題が全て妥当というわけではないため、教員によるチェックと修正が不可欠です。しかし、これをし過ぎると結局難易度が上がってしまうというジレンマも出て来てしまいます。生成 AI はあくまでも道具であり、使う側（今回は教員）に使いこなす知識・スキル・理念があることが必須です。これを認識して使えば、生成 AI は教員の良い相棒になる可能性があると感じています。

報告2：生成 AI を活用した情報系教科の教材作成

情報工学科 平石 拓 先生

まず、生成 AI にも様々なものがありますが、私は「Claude」および「Claude Code」を主に使用しています。これらは、プログラム生成能力に定評があるためです。私が授業づくりの際に生成 AI を使うのは、①講義資料の作成、②テストの作成、③プログラムの作成です。

①講義資料の作成では、特に数式や概念を図にする作業に生成 AI を活用しています。数式や抽象的な概念は、文章だけで説明するよりも、図解した方が視覚的に理解しやすくなります。②テストの作成は、先の岸先生の事例と似ています。講義資料の PDF をまとめて生成 AI に提供し、「○×問題を30題作って」などと指示し、出てきた問題を教員側で修正・厳選します。ポイントは、多めに生成させて、良いものを選ぶということです。問題作成の時間を大幅に短縮でき、その分教員は問題の質の確認と調整に注力できます。③プログラムの作成は、まさに情報系らしい使用法かもしれません。たとえば、ある複雑な処理の「正しいプログラム」と「ダメなプログラム」を、学生が自分で試せるようにするため説明ドキュメントとともに作成しています。このようなプログラム例の作成は非常に手間がかかるため、教育効果が高いとわかっていても断念していました。それが生成 AI により可能になりました。

これからの（情報）教育では、生成 AI を使いこなす、生成されたものをレビューできる能力をいかに養うかが重要ではないでしょうか。考え方を転換し、学生・教員双方が AI リテラシーを高めていくことが必要な時代になったと思います。